

原子力に関わる人文・社会科学的総合知問題研究専門委員会／  
社会・環境部会部会 合同セッション

「総合知」の視点と原子力利用の諸課題：「風評」問題をめぐって

[1F\_PL02]

# 「風評」問題に関する検討状況の報告

2024年3月26日（火）

日本原子力学会 2024年春の年会

東京電機大学 寿楽浩太（社会・環境部会運営委員／研究専門委員会幹事）

# 検討の前提

- 1F事故後の「汚染水」→「処理水」をめぐる紆余曲折とステークホルダー間の信頼関係構築の困難
- 2018-2020 経産省有識者会議での検討
- 2021.4 「処理水」海洋放出方針の政府決定
- 2022.3 社環部会セッション「「風評」と「風評被害」を再考する」

# 委員会の問題意識

- 国内で一般に「風評（被害）」として定式化される問題を、改めて学際的かつ学術的に見つめ直す
- 特に、「風評（被害）」という「ものの見方」そのものが持つ政策上の、あるいは社会的な逆機能に留意する
  - 「風評（被害）」概念の「ガラパゴス」性、学術的根拠・裏づけの希薄さ  
(社会科学のどの分野でも国際的には通用しない概念)

# 「風評（被害）」とは

- 「ある社会問題（事件・事故・環境汚染・災害・不況）が報道されることによって、本来「安全」とされるもの（食品・商品・土地・企業）を人々が危険視し、消費、観光、取引をやめることなどによって引き起こされる経済的被害のこと」（関谷2011）

# 原子力分野に起源

- 「風評被害は、もともとは原子力が関係する事故で問題になりはじめた。「安全である」にもかかわらず、事故が起きた周辺の土地の関係者や地元の漁業者が経済的被害をこうむること、またその被害が原子力損害賠償法で補償されないことが問題になった」（関谷2011）

# 責任転嫁のニュアンス

- 「政治家、行政関係者、食品関連業者や原子力関係者などが、ある食品・商品について「安全である」ということを強調したいときに「風評被害」という言葉を使う傾向がある。端的に言ってしまえば、このとき彼らの言葉の裏には、「経済的被害が発生しているのは、私たちのせいではない」「買ってくれない消費者のせいだ」と言いたい気持ちが含まれている」(関谷2011)

# 問題のリアリティとの齟齬

- 「科学的なリテラシーはたしかに重要だが、それが皆に備わったとしても、風評被害はなくなる。なぜなら流通や組織という要素が組み合わさることによって、（引用者補足：消費者）自身の判断は別にして風評被害が発生していくからである。」（関谷2011）
- なお、欧州の有名な既往研究（遺伝子組み換え作物に関するもの）において、ある技術についてより正確な知識を持つ市民がより忌避的な態度を取り、その逆もまた然りという反証例もある（Midden et al. 2002、標葉2016）

# 「風評（被害）」概念の問題性

- 原子力分野の事故・被害と法制度上の建て付けの間の制約との間の相互作用から出現（ローカルな事情）したにも関わらず、類似の問題一般に関する人びとの認識を強く規定
- 損害の責任を消費者側に転嫁する含意を持つため政策・事業推進側の関係者には「使い勝手」がよい
- 論理的な帰結としても、政治的な結末としても、消費者側への働きかけばかりが「対策」として浮上



# 「風評（被害）」概念の逆機能

- しかし「風評被害はなくなる。なぜなら流通や組織という要素が組み合わさることによって、（消費者）自身の判断は別にして風評被害が発生していくから」（関谷2011）
- だとすると、消費者向けの対策は無限に行われうる。そして、完全に無効とも言えないが、問題の有意な解決にもつながらない均衡構造を生み出してはいないか

# 批判的なメディアまでもが...

- 朝日新聞社説「原発事故から12年 教訓捨てる  
「復権」 許されず」（2023年3月11日朝刊）  
「.....敷地には、**汚染水**を処理した水のタンクが林立する。政府は「春から夏ごろ」に海に放出する構えで、土木工事が急ピッチで進む。だが、**風評被害**への危惧が強く、地元漁業者らは反対の姿勢を崩していない。.....」（強調は引用者が追加）

# 問題の再定式化ができないか

- この問題を指す際に国際的に通用する英語の術語としては“reputation(al) damage”が一般的
- 「風評（被害）」の語が含意する問題構造は“social amplification of risk”（リスク研究、社会心理学）として認識される
- あるいは、社会学・社会心理学における古典的な研究分野として“collective behavior studies”（集合行動論）があるし、「負のイメージ」などと言われる現象には*stigma*（スティグマ：社会的烙印の意、カナダの社会学者Goffman（1963）以来の研究蓄積）

# 現実にはさらに先行している

- 2023年には、「処理水」の放出が開始された
- 事前の懸念の大きさと裏腹に、国内での一次産品への「風評被害」は大きくならなかった
- 他方で東アジア近隣国や太平洋島嶼諸国を中心に強い反発の動きがあった
- 外交・国際関係の要素も複雑に絡む中での“social amplification of risk”を社会現象として分析的に捉えるには、今や「風評（被害）」概念はいかにも力不足

# 「総合知」のさらなる展開に向けて

- 人文・社会科学を含む 「総合知」を活かした社会課題の解決、well-beingの実現 という方向性（第6期科学技術・イノベーション基本計画）
- 原子力側の都合から問題を捉えてきた 「風評（被害）」概念に代わり、“social amplification of risk”を多面的・学際的に捉えた上で対処策を提示する報告書を取りまとめていきたい
- 「風評（被害）」問題以外の原子力技術をめぐる諸課題にも「総合知」の視点を適用していきたい